【優秀賞】

徳島県阿南市における
野球によるまちづくりについて

福本　蒼汰
岐阜大学地域科学部１年

キーワード：まちづくり，草野球，アマチュア野球，やりがい創出，徳島県阿南市

１．はじめに

本稿は，野球を用いたまちづくりを 10 年以上続けている徳島県阿南市を研究対象とし，具体的にどのような活動をしているのか，また，その活動に関わる阿南市民はどのような思いで活動に参加しているのかを考察したものである。21 世紀に入り，スポーツによるまちづくりにスポットライトが当たり始めたが，県や市などの行政が具体的に活動方針を示し，アクションを起こすといったことが少なかった。そのような中で，阿南市はいち早く「野球のまち阿南構想」を掲げ，スタジアム建設，市役所内に「野球のまち推進課」を設置するなど，積極的にスポーツによるまちづくりを推進してきた。阿南市は，他の市町村にスポーツによるまちづくりの利点を伝え，日本全体にスポーツによるまちづくりの可能性を広めたといっても過言ではない。「スポーツまちづくり」のトップランナーとして走り続ける阿南市の活動について，今から考察していく。

２．阿南市の産業史

阿南市の行う野球によるまちづくりの具体的事例について論述する前に，阿南市の産業史を記述しておく。

1958 年に富岡町と橘町が合併して誕生した阿南市は，徳島市に次ぐ県下第二の都市として，産業面での貢献を期待されていた。阿南市は「工場設置奨励条例」の制定をはじめとする工業開発を推進し，神崎製紙や日本電工などの工場を誘致して雇用の創出，税収入の増加を図った。そのかいもあり，1964 年に阿南市は新産業都市に指定され，工業開発を中心とした近代化が急速に進展することとなった。

しかし，急速な工業開発による公害問題の発生や，二度にわたるオイルショックの影響により，阿南市に進出を表明していた企業が次々に撤退を表明すると，阿南市は厳しい財政運営に直面することになる。

そんな状況を打破するべく，阿南市は「第二次阿南市総合開発計画」を策定し，「水と緑の青年産業都市」を掲げた。また，バブル景気による地価高騰の影響で大都市近郊に安価な工業用地がなくなったため，阿南市の空きとなった工業用地に多くの工場が進出するようになった。

1993 年に，阿南市に本社を置く日亜化学工業（株式会社）が高輝度青色 LED の開発と製品化に成功し，その後も数々の世界初となる光半導体を商品化した。阿南市は今でも「光のまち」として世界に知られており，今後も数々の光半導体の開発が期待されている。

３．野球のまち推進事業の時系列展開

ここでは，「野球のまち阿南構想」に基づく阿南市の野球のまち推進事業について，時系列順に沿って述べていく。

後ほど詳しく述べるが，阿南市が野球によるまちづくりに取り組む契機となったのが，2005 年に長野県上田市で行われた全日本生涯野球大会の視察である。その二年後には大型スタジアムであるアグリあなんスタジアムが完成し，同年に「野球のまち阿南推進協議会」が設置されるなど，本格的に野球によるまちづくりに着手し始める。2010 年には，市役所内に「野球のまち推進課」が設置され，その特殊な課の設置に全国から注目されるようになった。その後も，私設応援団「ABO60」（後述）の結成や，六大学オールスターゲームの開催など，あらゆるアクションを起こして「野球のまち阿南」を全国に広めようとしている。

４．「野球によるまちづくり」の背景

阿南市の野球のまち推進事業に最も精力的に取り組んでいたのが，初代野球のまち推進課課長の田上重之である。田上は，幼いころから野球が大好きだったが，生まれつき障害を持っており，満足に運動ができずにいた。しかし，それでも諦めず，近所の友達と野球チームを結成し，毎日のように野球をして遊んでいたという。野球に対しての情熱は大人になっても変わらず，田上の息子が小学五年生の時には，息子の所属していた少年野球チームの監督となるなど，野球と深く関わる人生を送っていた。

そんな田上に転機が訪れたのは，2005 年のことである。田上は，当時の阿南市長である岩浅嘉仁に，長野県上田市で開催されている全日本生涯野球大会の視察を提案した。岩浅は，中高年の草野球チームの選手が熱心にプレーする姿はもちろん，試合後の宿舎での

厚い接待に感動し，阿南市でも野球によるまちづくりに早急に取り組むといった趣旨を田上に伝えた。この視察が，今現在も続いている「野球のまち阿南構想」の原点となった。

阿南市は元々，草野球が非常に盛んな地域であり，還暦野球チームが 10 チーム，50 歳以上のチームが 7 チーム，40 歳以上のチームが 9 チームある。還暦野球チームは徳島県内で 16 チームあるが，そのうちの 10 チームが阿南市内で活動していると考えると，阿南市はどれだけ草野球が盛んかが分かる。子供たちへの指導も熱心で，2021 年度の本塁打王，ベストナインに輝いたオリックスの杉本裕太郎や，今年のドラフトで中日から三位指名を受けた森山暁生など，市内から数多くのプロ野球選手を輩出している。

ただ，野球によるまちづくりと聞いて，「なぜプロ野球ではなくて草野球なのか」と疑問に感じた読者も多いように思う。たしかに，前述した通り，阿南市では草野球を含むアマチュア野球が盛んで，全国に誇れる価値となっているのは間違いない。しかし，スター選手が数多くおり，ファン層も厚いプロ野球と比べ，アマチュア野球はそれほど多くの経済効果をもたらさないのではないか。実際，プロ野球の球団によるまちづくり，地域活性化には，多くの事例がある。NPB に所属する球団の中で一番の地域密着型のチームであるのが，広島東洋カープである。カープは，NPB 唯一の個人所有ではない球団であり，創設当初から「地域をよりよくしていく」という理念を持っていた。その理念と近年のプロ野球球団の地域密着ブームが相まって，カープは様々な地域づくりに取り組んできた。例えば，カープの本拠地であるマツダスタジアムの近くにあるコストコでは，駐車場をスタジアム利用者に解放し，コストコで買い物をした場合，駐車場料金を無料にしている。また，スタジアム近くのゲストハウス型婚礼施設では，カープとコラボしたオリジナルのウェルカムボードを配布している。もちろん，カープだけでなく，他球団も地域活性化に取り組み，多大な経済効果を生み出している。

上記のように，プロ野球の球団による経済効果は大きい。プロ野球チームのない阿南市でも，キャンプの誘致や公式戦の開催などで経済効果を生み出すことも可能だ。ではなぜ，プロ野球ではなくアマチュア野球にこだわるのか。そこには，プロ野球キャンプ地が九州や沖縄に年々移動するようになり，今から誘致しても成功する可能性が低いという外部的要因から，仮に誘致に成功したとしても，プロ野球のキャンプが満足にできるくらいの設備が少ないというハード面，内部的要因まで，多数の理由が存在している。対してアマチュア野球は，他のライバルとなる市町村が少ないため誘致に成功しやすく，プロ野球に比べて設備投資等に係る費用を抑えることができる。また，先述した通り，阿南市は元々アマチュア野球に熱心な人が多くおり，運営組織を作った際，比較的スムーズに運営することが可能となる。

田上はこのことを踏まえ，プロ野球ではなく，アマチュア野球をもちいたまちづくりを提案したのである。

５．具体的な取り組み

ここでは，阿南市が「野球のまち阿南構想」に基づいて行われたイベントや取り組みについて，詳しく述べていこうと思う。

まず初めに取り上げたいのは，野球観光ツアーである。野球観光ツアーとは，阿南市での試合と宿泊がセットになった旅行プランのことで，このツアーが阿南市の取り組みを全国区に押し上げたといっても過言ではない。このツアーの魅力的なところは，リピーターが多いという点である。その理由を，試合面と宿泊面の二つの視点から考える。試合面での理由の一つは，設備が行き届いた球場で試合ができることである。主な開催場所として，アグリあなんスタジアムが用いられるが，このスタジアムはプロ野球の試合が開催できるほど設備が充実しており，憧れの大型スタジアムで多くの試合ができる選手たちは，張り切ってプレーする。また，スコアボードに選手の名前が刻まれ，ウグイス嬢が選手名をコールし，審判もグラウンドキーパーもいるという，野球好きの心をくすぐるような，めったに経験できない本格的な試合をすることができる。宿泊面では，地元住民による厚い接待が理由に挙げられる。「歓迎交流会」と題されたこの接待では，地元の特産品を使った料理を提供するのはもちろん，徳島県の伝統芸能である阿波踊りが披露される。選手たちはお酒を片手に野球談議に花を咲かせ，野球漬けとなった一日を終えることになる。この野球観光ツアーは，「アマチュア野球（特に草野球）が発展している阿南市だからこそできる本格的な試合」を提供し，宿泊面でも，市や県の特色を前面に出しながら厚く接待することで，リピーターを確保していることが分かる。

次に取り上げるのは，高校野球部の合宿誘致である。北信越地方や東北地方のチームでは，冬に大量の雪が降るためグラウンドが使えず，練習場所の確保に頭を悩ます高校も多くある。特に，春の選抜（選抜高等学校野球大会）直前期において，降雪による練習不足が露呈し，試合に勝てない高校も多く見受けられる。そこに目を付けた田上は，選抜直前期の合宿を阿南市で受け入れるアイデアを提案した。最初に合宿に訪れたのは，新潟県佐渡ヶ島にある佐渡高校である。佐渡高校は，阿南市の阿南高専と小松島高校と練習試合を行うなど充実した合宿を行うことができ，雪による練習不足を回避した。この活動が全国的に有名になったのは，2015 年の福井県，敦賀気比高校が合宿に訪れたときである。阿南市での合宿により充実した練習をすることができた敦賀気比高校は，その年の選抜で見事優勝し，北陸勢として春夏通じて初の全国制覇を成し遂げた。「雪国では冬の練習が満足にできないため，選抜で勝つのは難しい」という問題点に着目し，実際に合宿を誘致して雪国の高校の優勝に一役買った阿南市の功績は，計り知れないものがある。

次に紹介する取り組みは，モンゴルとの交流事業である。元々，阿南市が 2006 年に併合した旧那賀川町がモンゴルの少年たちに野球道具を寄付したのが交流の始まりで，その後もモンゴルの野球部員が那賀川町にホームステイしたり，モンゴル国立野球場の建設を支援するなど，関係が続いていた。そんな，阿南市とモンゴルの交流を知った映画プロデュ

ーサーの谷口広樹から，「映画製作に協力してほしい」と阿南市に問い合わせがあった。谷口は「モンゴル野球青春記」という映画を製作するため，モンゴルと長年にわたり交流を続けてきた阿南市に協力を要請したのである。この映画は全国各地で上映され，ロサンゼルスで開催された「オールスポーツ映画祭」の長編映画部門のグランプリを獲得した。野球が普及していないモンゴルで野球普及活動を行い，交流が長年にわたり続いている点は，「野球」というスポーツの可能性が示唆されているのではないか。

上記の活動以外にも，全国的に見ても画期的な取り組みがある。例えば，70 歳以上の選手で構成されたチームが参加する「西日本古希軟式野球大会」や，チームや選手を頻繁に交代しながら一日中試合を続ける「長時間野球大会」，選手 9 人の年齢の合計が常に 500 歳を超えていなければならないといったルール下で試合を行う「500 歳野球大会」などが挙げられる。また，昨今では知名度が上昇してきたが，当時まだ目新しかった女子プロ野球の開幕戦をアグリあなんスタジアムで開催したり，東京六大学のオールスターゲームを誘致するなど，アマチュア野球の振興にも積極的に取り組んでいる。

６．市民の反応，協力

ここまで，阿南市が取り組んできた野球によるまちづくりについて，具体例を示しながら述べてきたが，この章では，野球によるまちづくりを行うと宣言した時の市民の反応や，実際どのように市民が活動に関わっているのかについて，論述していく。

2007 年に「野球のまち阿南構想」を発表した当初，市民からの声は，圧倒的に構想に反対する趣旨のものが多かった。「なぜ野球という特定のスポーツに重きを置いてまちづくりをするのか」といった疑問の声や，「やめた方が良い」といった構想撤回を促す声も多く上がった。そして徳島県からも，「県をあげてサッカーのまちにしようと考えているため，阿南市もサッカーによるまちづくりを推進してくれ」といった旨の通達がくるなど，強い向かい風を受けた中でのスタートとなった。

しかし，田上を中心とした野球のまち推進課が日々努力し，数々の事業で成功をおさめていくと，ボランティア等で協力してくれる市民が増えていった。この「市民のボランティア精神」が，現在まで続いている「野球のまち阿南」において大きな役割を担っている。そのボランティア精神が如実に表れたのが，「ABO60」の結成である。ABO60 は，阿南市に住む 60 歳以上の女性で構成されたチアガール組織で，ABO はそれぞれ「阿南」，「ベースボール」，「おばちゃん」の頭文字をとっている。ABO60 のメンバーは，野球観光ツアーで阿南市を訪れたチームの接待をしたり，試合時にはチアダンスで選手を応援するなど，精力的に活動している。メンバーの中には市議会議員までおり，その特殊なチア組織に瞬く間に地全国からの注目が集まった。

強い反発からのスタートだった「野球のまち阿南構想」も，今では多くの市民の理解，協力があって成り立っている。市民の協力を引き出すために，田上には気を付けているこ

とがあるという。それは，「文句を言わないこと」と「自主性を尊重すること」，そして「あまり目立たない影の協力者を，メディアで紹介していただくこと」である。特に三つ目は，野球だけでなく，どのスポーツにも共通して言えることではないか。スポーツは，選手だけでなく，裏で支える人がいるから成り立つ。そんな人たちにスポットライトを当て，自尊心の向上につなげることが，多くの協力者を得るために必要なことではなかろうか。

７．野球によるまちづくりの意義

「野球のまち阿南構想」を基にした野球によるまちづくりには，大きな意義が二つ存在する。

まず一つ目は，新たなまちづくり手法の定着である。先述した通り，阿南市はかつて外部から工場を誘致して経済発展を目指す「外発的発展」が中心だったが，21 世紀に入り，市内にある資源を大いに活用した「内発的発展」により経済成長を遂げた。「アマチュア野球」という，地域振興策においてはあまり注目されていなかった，いわばニッチな部分に着目し，自分たちの地域が全国に誇れるものを再発掘してまちづくりに生かすという阿南市のアクションは，これからの地域振興において非常に重要な視点になってくるのではないか。

二つ目は，市民のやりがい創出である。本稿にも何度か出てきた ABO60 のメンバーはボランティアで活動しているが，自分のやりたいことができているため，皆活動を楽しんでいる。他の市民も，他県から来た選手と交流する中で自分の生きがいを見つけ，精神的活力としている。

８．「野球のまち阿南構想」の今後の課題

2007 年から阿南市で取り組まれてきた野球によるまちづくりには，今まで述べてきたような成功事例がほとんどだが，今後の課題となってくる点も存在する。

主に，取り組みについての認知度は高いものの，実際に活動やボランティアに参加経験のある市民が少ないことが挙げられる。大学野球や女子野球の試合が球場で行われた際，試合観戦という形で球場に足を運ぶ市民は多いものの，清掃員や接待など，試合の運営面をサポートする市民は限られる。今後は，先述した ABO60 のような中高年だけでなく，体力のある若者も加わって事業に取り組んでいく必要がある。また，イベント時の球場周辺の交通渋滞が市民の生活に支障をきたしていることもあり，早急な改善が求められる。

これからは，さらに多くの阿南市民が「阿南と言えば野球」と胸を張って言えるように，行政と市民の協働体制の構築が重要になってくると考える。

９．おわりに

本稿では，徳島県阿南市の野球によるまちづくりについて，その具体的活動から市民の反応まで，様々な視点から述べてきた。プロ野球による地域振興策が主流となっている 21 世紀において，自分たちの地域ではアマチュア野球が盛んであると冷静に判断し，明瞭な成功例がなかった「アマチュア野球によるまちづくり」を推進した阿南市の功績は計り知れない。これからは，阿南市の研究をライフワークにし，実際に現地に足を運びたいと考えている。現地の方の声を聞き，より内容の濃い研究にしていきたい。これからの阿南市の益々の発展を，心から願っている。

【参考文献】

・『野球のまち阿南をつくった男』田上重之，2021 年，大学教育出版
・「スポーツまちづくりがもたらす経済効果―徳島県阿南市の「野球のまち推進事業」を事例に」和田崇，2021 年，経済地理学年報第 67 巻，pp.43-57
・「マツダスタジアムの誕生と都市の「賑わい」創出」梅村重之，中野太貴，西川尚吾，山本百恵，2018 年，地理学報告第 120 号，61-66
・https://www.city.anan.tokushima.jp 「産業・労働」阿南市　最終閲覧日 2023 年 1 月 22 日 15 時 33 分